

Title	人工物 (artifact) としての絵本 : 母親の子どもの認知発達に関する絵本への期待調査から
Author(s)	石川, 由美子
Citation	聖学院大学論叢, 第 24 卷(第 1 号), 2011.10 : 75-88
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3331
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈原著論文〉

人工物 (artifact) としての絵本 ——母親の子どもの認知発達に関する絵本への期待調査から——

石 川 由美子

A Study of Picture Book as Artifact:

Through a survey of mothers' expectation for the picture books pertaining to
cognitive development in children

Yumiko ISHIKAWA

This study attempts to clarify the ideational aspects of the picture book, which has the function of an artifact, according to a survey of mothers' expectations for the picture book pertaining to cognitive development in children. The first objective of the study was to clarify the cultural semantic structure of the mother's expectations of the picture book. This aspect shows three levels of tools in cultural semantic structure, namely, the "tool for cultural transmission", the "development tool for trust and love", and the "development tool for imagination and thinking ability." The second objective was to clarify whether the mothers' expectations of picture books varied according to their children's development level. As a result, this study has revealed that, depending upon the development level of the child, there are both cases where expectations vary and cases where they do not. The third objective was to clarify the reason why mothers were motivated by picture books in their activities with their children. The study revealed that mothers were motivated to read picture books to their children because they remembered their own mothers reading to them, the memory of reading picture books themselves during childhood, and the pleasure of reading to their own children. Thus this study also shows the possibility of picture books serving as artifacts which connect one generation to another.

Key words; picture book, artifact, cognitive development, cultural semantic structure

Key words; 絵本, 人工物 (アーティファクト), 認知発達, 文化的意味構造

はじめに

子育て文化の中の人工物 (artifact)

子どもを育てる場には、子どもを育てるためにあつらえられた沢山のモノが配置されている。ベビーベット、哺乳瓶、よだれかけ、ぬいぐるみ、ガラガラ、など数え切れないほど沢山のモノが子どもの周りに準備されている。ほとんどが大人になれば必要なくなるし、子どもがある時期に達すれば子ども自身さえも見向きもしなくなる。あまりに当たり前に行過ぎてゆく子育ての風景に関して、「どうしてなんだろうか」と、立ち止まって考えることさえない。

文化という言葉には、何かを育成するという意味がある (Williams, 1983)。大人が子どもの健やかな成長を願って準備したモノは、大人の願いに応じ、その願いを叶えるための装置として働く。したがって、子育てのために準備された多くのモノには、子どもの育ちのために働く人工物 (artifact) としての機能が埋め込まれていると考えられる。Cole (1977, 1996) は、人工物を物質世界のひとつの側面と捉え、人工物は目的志向的な人間の行為に取り入れられ、歴史の中で変形されてきたと指摘した。また、人工物は物質的なものであると同時に、観念的であるとし、それを利用した人々の活動の過程で、物質的であるだけでなく、文化的な意味を持つ存在として人々に認識されるものと指摘した。つまり、子育ての文化は、その時代の社会状況、生活様式、および大人が子どもをどう位置づけているのかで変化するものでもあるが (吉岡, 2004)、そのような変化の中においてさえも変わらず子どもの周りにあり続けた人工物 (artifact) には、利用する大人側にそのモノに対する記号的、存在的意味の認識があると考えられる。そして何よりも、そのモノを子どもとの間で利用しようと思うのであるから、そのモノに対する動機が生じる情動的意味の認識も存在すると考えられる。

人工物 (Artifact) としての絵本

子どもの誕生早期から子どもとの関わりに準備されている代表的なモノの1つに絵本がある。絵本は、子どものことばや認知発達を促進するという報告も数多くなされてきた (Ninio & Bruner, 1978; Ninio, 1983; Snow & Goldfield, 1983; Panofsky, 1994)。著者はこれまで、絵本には、人工物 (artifact) として機能する装置が埋め込まれていると考え、いくつかの報告を行なっている。その1つは、絵本それ自体の構造に視点を当てた研究である。絵本自体の構造を明確にすることができれば、限定されまた制約された絵本の構造によって引き起こされる大人の目的志向的な行為が予測できる。これらの研究で絵本には、物理的構造があり、物理的構造の土台の上で表される表現構造 (表現構造枠組み、表現形式、表現内容) があること、またそれらは物語文法規則のような固定した構造ではなく、子どもの発達水準に対応できるように単純なものから複雑なものまで多様にある

ことが明らかとなった(石川・石川, 2004; 石川, 1998)。しかし, この研究では絵本によって引き起こされる具体的な大人の目的志向的行為については明確にできなかった。

第2の視点として, 絵本の中で生じる母親および子どもの「めくる」行為や「指さし」行為に関する報告を行なっている(石川, 2009; 石川, 2010)。これらの行為は, 絵本によって誘発され, また子どもの絵本理解を促進する目的志向的行為として注目されるものであった。この二つの目的志向的行為は, はじめ母親の側が認知しているものであるが, その行為は, 母親との活動を通して子どもに取り入れられることが明らかとなった。それだけではなく, 活動の過程で, 子どもが活動の調整を行なうためにその行為を行なう, つまり, その行為の存在的意味をうかがわせる利用の仕方が明らかとなった。これらの研究は, Cole (1977, 1996) が述べたように目的志向的行為に取り入れられる人工物としての絵本の側面と, その意味を一部分, 明らかにした。しかし, あくまでも絵本で生じる目的志向的行為の一部を取り上げたものであるため, 今後さらに絵本という制約の中で生じる目的志向的行為を明らかにしていく必要もある。

第3の視点は, 絵本を利用しようとする大人側の認知の問題を, 子どもに絵本を利用しようとする大人の発達の期待の視点で明らかにしようとしたものであった。この一連の研究の中で, 著者は, 絵本という人工物の観念的である側面, 絵本を利用した人々の活動の中で文化的な意味を持つ存在として, 絵本が認識される過程を明らかにしたいと考えた。絵本と他の子育て文化の教材との間で, 大人の発達の期待が異なるものであるかどうかを明らかにしようとした研究はそのひとつの試みである。保育学生を対象にしたこの研究では, 保育学生が絵本に抱く期待は, 他の保育教材とは異なることを明らかにしている(石川・石川, 2001; 石川・石川, 2003; 石川, 2006)。つまり, この研究は子育て文化の中で絵本が大人にとって特定の文化的意味のある人工物 (artifact) であることを明らかにする結果となった。

母親が子どもの認知発達の促進のために絵本に抱く期待

上述した第3の視点の研究で, 絵本が特定の文化的意味を持つ人工物 (artifact) の機能を持つものであることはある程度, 明らかとなった。従って母親と子どもとの絵本を介した活動が, 子どもの認知発達にどのような影響を与えうるのかについては, 母親の絵本に対する発達の期待の構造を知ることができれば, ある程度, 知ることが可能となる。母親にとって絵本が特定の文化的な意味を持つのであるなら, 絵本は, その特定の文化的意味の制約を受けた子どもの認知発達の場を作り出すであろう。絵本は, 子どもの認知発達のある領域に特化して働きかける人工物と仮定できる。これまでに報告されている言語発達と絵本との関連は, そのような絵本の人工物 (artifact) としての側面の一端を示す結果である。また認知能力との関連に視点をおいた研究報告もその一端を示すものであろうと考える(光田, 2005; 2006)。

母親が子どもの認知発達の促進のために絵本に抱く期待として, 秋田ら (1996) の研究および石

川（2005）の研究でも、絵本に子どもとのスキンシップやふれあい、コミュニケーションの道具として期待していることなどが示されている。しかし、これらの研究は、母親の発達の期待が、子どもの認知発達と共に変化するものであるのかあるいは、不変であるものなのかの発達的問題については明らかにしなかった。また、絵本そのものの多様な表現枠組みや表現形式および表現内容と母親の発達の期待との関連についても明らかにしていない。そもそも、なぜ、母親が絵本に動機づけられるのかについて、明らかにしようとした研究も著者の知る限りない。

そこで本研究では、母親が子どもの認知発達の促進のために絵本に抱く期待を調査することで、母親の絵本に対する発達の期待の認知構造を明らかにし、絵本の構造との関連を検討する手立てとしたい。また、母親が子どもとの活動において、なぜ絵本に動機づけられるのかについても明らかにするステップとしていきたいと考えている。

目 的

母親が子どもと絵本活動を行う場合、母親は、子どもの認知発達に絵本がどんなふうに影響することを願うのか。本研究では、絵本の人工物（artifact）としての観念的側面を以下の仮説に基づき検証していくことを目的とする。

1. 絵本に対する母親の発達の期待は、どのような文化的意味構造をもつのかを明らかにする。絵本が人工物（artifact）であり、観念的側面を持つものであるなら、絵本に関する母親の意識には、絵本に対する文化的な意味構造が存在するであろう。
2. 絵本に対する母親の発達の期待は、子どもの発達水準によって変化するものなのか、否かについて明らかにする。絵本自体の構造にはいくつか特徴的な枠組み、形式、内容が存在していた。それらが子どもの認知発達水準に関連しているものであるなら、母親の絵本に対する発達の期待は、子どもの発達水準に応じて変化するものであろう。
3. 絵本の読み活動を行なうことで、母親自身の子ども時代の絵本に関する快反応が随伴される、あるいは現在の子どもとの読み活動で母親自身に快反応が随伴されるなら、絵本が母親の活動の誘因となり動因となるであろう。

方 法

対 象

0歳から6歳までの子どもの母親（保護者を含む）391名。

2005年6月から9月にかけて、絵本に対する発達の期待調査に関して了解が得られた栃木県内の保育所および幼稚園にアンケートを依頼した。それぞれの施設に在籍の保護者には書面にてアン

ケート主旨を説明し、391名から回答を得た。

手続き

2001年に行なったアンケート23項目(石川, 2001)に加え、絵本を利用するにあたって意識していること、あるいは絵本に関する想い、思い出などに回答する自由回答欄を設けた。なお、アンケートの23項目には、5:とてもそう思う、4:ややそう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:まったく思わない、の回答欄を設けた。

分析の視点

次の3つの観点で分析を行なう。1. アンケート調査23項目から母親の発達の期待の因子を因子分析法により抽出する。2. 抽出された因子から、母親の発達の期待は、子どもの発達の水準によって変化するかあるいは、子どもの発達水準に影響されるものではないのかを明らかにする。3. 自由回答欄に書かれた記述のうち、絵本に対する想いや思い出に関するエピソードを整理することで、絵本というものが世代間でどのように利用されてきたのかを明らかにする。

結 果

絵本に関する母親の発達の期待の意味構造

調査に回答が得られた391名のうち、母親以外の保護者(祖母、父など)の回答が30名あったため、この分析には361名の調査結果を用いて分析を行った。23項目のうち、項目の因子負荷や共通性が低い項目等を除き、最終的に17項目での因子分析を試みた。17項目のクロンバックの α 係数は0.9であった。

Table 1は、主因子法、バリマックス回転での因子分析の結果である。17項目から主要な3因子が抽出された(累積寄与率 54.69%)。

第一因子は、「日常生活に必要な知識を身につけさせるため」、「本を通してしつけをするため」、「生活習慣を意識づけするため」などの10項目が抽出された。子どもに母親が文化を伝達するためのツールとして絵本に期待をしていることを示すと考えられる。そのため第1因子は、『文化の伝達ツール』とした(因子寄与率 31.14%)。第2因子は、「絵本を通して親子のコミュニケーションを図るため」、「絵本を通して親子のふれあいをするため」、「絵本を通してスキンシップを図るため」、「子どもが安心して眠れるようにするため」からなり、母親が子どもとの間で信頼と愛情を築くツールとして絵本に期待していることが示された(因子寄与率 14.25%)。第2因子は、『信頼と愛情の発達ツール』とした。また、第3因子には、「空想したり夢がもてるようにするため」、「子どもが本の世界を楽しむため」、「物事を深く考えるきっかけを与えるため」からなった。このことが

Table 1 母親の絵本に対する認知発達の期待 (願い)

	第1因子 文化の伝達ツール	第2因子 信頼・愛情の発達 ツール	第3因子 想像力や思考能力 の発達ツール	共通性
日常生活	0.80	0.16	-0.04	0.67
しつけ	0.78	0.19	0.01	0.64
生活習慣	0.77	0.20	0.03	0.63
教養	0.75	0.15	0.04	0.58
文字を覚	0.72	0.01	0.20	0.56
社会性	0.72	0.18	0.08	0.55
教訓	0.69	0.16	0.07	0.51
話す力	0.66	0.11	0.26	0.52
言葉を増	0.60	0.13	0.24	0.43
伝承の話	0.54	0.08	0.27	0.37
親子のコ	0.16	0.87	0.08	0.80
親子のふ	0.14	0.81	0.18	0.70
スキンシ	0.17	0.77	0.10	0.63
安心して	0.37	0.39	0.11	0.30
空想・夢	0.04	0.16	0.73	0.56
本の世界	0.04	0.14	0.67	0.46
深く考え	0.31	0.03	0.54	0.38
因子寄与	5.29	2.42	1.58	
因子寄与率%	31.14	14.25	9.30	
累積寄与率%	31.14	45.39	54.69	

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

ら母親は、子どもが子ども自身で想像する力を伸ばしたり、思考する能力を伸ばしたりするためのツールとして、絵本に期待することが示された。そこで、第3因子は、『想像力や思考能力の発達ツール』とした (因子寄与率 9.3%)。

母親の絵本に対する発達の期待の変化

第1から第3因子の各項目の平均点を年齢別 (0から2歳, 3歳, 4歳, 5, 6歳) に示したものが Figure 1~Figure 3 である。

第1因子は、『文化の伝達ツール』として母親が子どもの発達に期待を寄せている項目である。この因子を構成する項目の中で、「文字を覚える」(F=3.96, P<.01), 「社会性を絵本を通して教える」(F=2.94, P<.05), 「話す力をつけるため」(F=3.02, P<.05), 「古くから伝えられている話は知ってもらいたいから」(F=3.21, P<.05) は、子どもの年齢間に有位差が認められた (Figure 1)。ボンフェローニ多重比較では、「文字を覚える」は0-2歳と5-6歳の間 (P<.01), 「社会性を絵

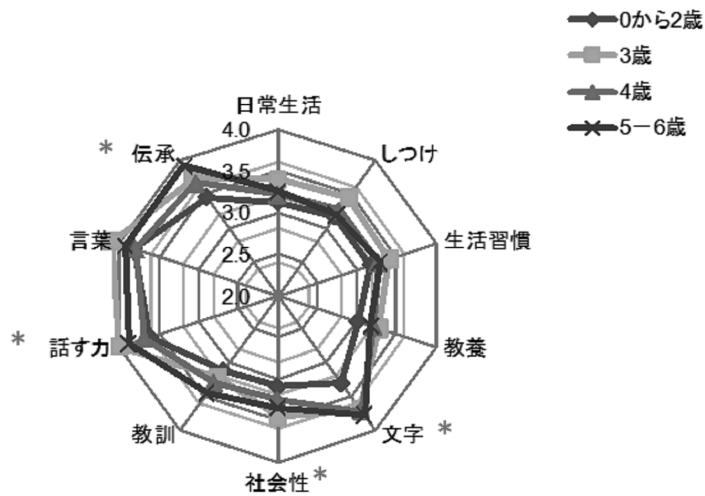


Figure 1 文化の伝達ツール

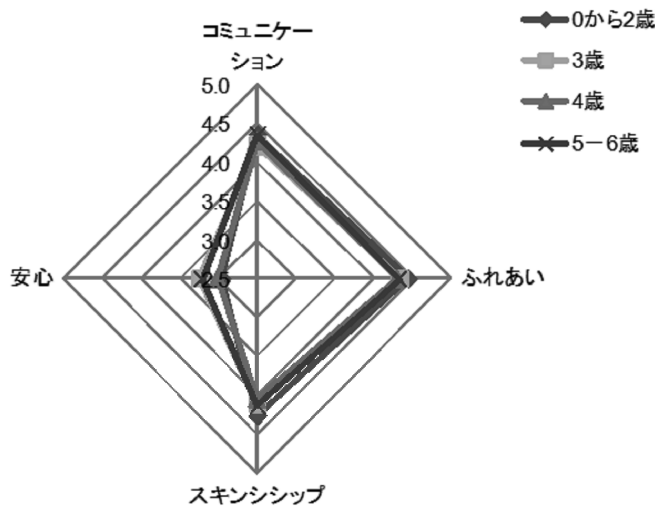


Figure 2 信頼・愛情の発達ツール

本を通して教える」は0-2歳と3歳の間 ($P < .05$), 「話す力をつけるため」は0-2歳と3歳の間 ($P < .05$), 「古くから伝えられている話は知ってもらいたいから」は, 0-2歳と5-6歳の間 ($P < .05$) で有意差が認められる結果となった。その他の項目では, 有意な差は認められなかったが, 子どものしつけに関する項目や, 生活習慣, 日常生活に関する項目, 言葉を増やすためという項目では, 平均得点が3歳児で高くなる傾向にあった。この結果から母親は, 子どもの発達年齢が3歳に達する前後で, 文化的に子どもに伝えたい内容を質的に転換あるいは, 拡張したいという意識を持つことがわかった。

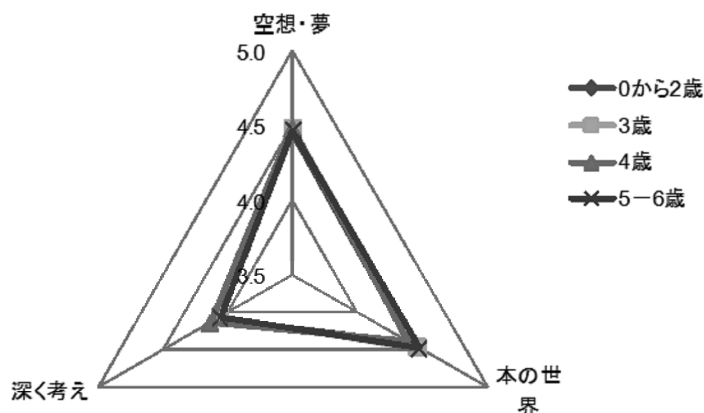


Figure 3 想像力や思考能力の発達ツール

第2因子と第3因子は、それぞれを構成する項目の平均得点に有意な差は認められなかった (Figure 2, 3)。

以上の結果は、因子によって子どもの発達水準に影響されやすい母親の絵本に対する発達の期待と、子どもの発達水準に影響されることのない母親の絵本に対する発達の期待があることを明らかにした。

絵本の読み活動への母親の動機

調査に回答いただいた391名のうち、自由記述欄に回答があったものは201名であった。その中で、さらに1) 保護者が子どもであった時の絵本に対する思い出を記述したもの、および2) 成人となり自分の子どもに絵本を利用しているときの思いを記述したものを抽出した結果、36の記述資料が得られた。自由記述については、母親以外の保護者が回答したものも含めた。実際には母親以外の保護者が分析資料に2名含まれる結果となった。

Figure 4は自由記述を時間の経過を軸に整理したものである。Mは母親、Cは子どもを示す。上付け文字のPは過去、上付け文字が無いものは、現在を示す。これを見ると、保護者が子どもであった時の絵本に対する思い出には、読んでもらえるのが嬉しかった、読んでもらうのをせがんだ、読んでもらうのが楽しみだった記憶が強く残されていた。また、ぼろぼろになって読んだ本を、今、見つけると懐かしくなる、今見ても好きだと思えるなどの記述が残されていた。以上の記述から、保護者が子どもだったときの絵本の思い出は、懐かしく、嬉しかった記憶として残していることが示された。また、過去自分が好きであった絵本に関しては、懐かしい、好ましいものとして記憶していた。

現在、自分の子どもと過ごす絵本の時間に関しては、次のようなことが示された。子どものころに読んだ本に再び出会う嬉しさと自分の子どもにそれを読んで聞かせるときの喜び、子どもと絵本

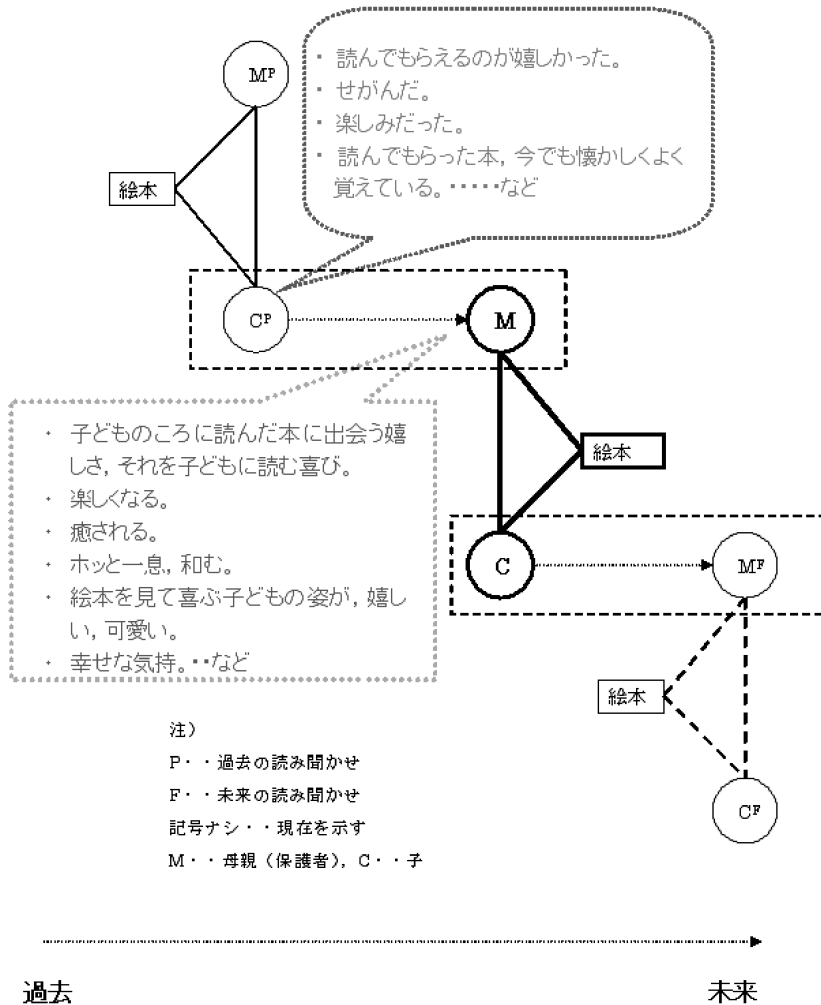


Figure 4 読み聞かせ空間で生じる世代性

を介して過ごす時間が、楽しい、癒される、ほっと一息、和むと感じる。また、絵本を見て喜ぶ子どもの姿を見て、嬉しい、かわいいと思う。そのような子どもとの時間が幸せと感じる、などであった。現在、自分の子どもと過ごす絵本の時間もまた、親にとって、好ましい感情と充実した時間として実感されていた。母親は、母親が子どもであったときの読み活動体験の記憶、現在の子どもとの読み活動の快体験、その両者は、母親の子どもとの絵本活動を動機づけることが示された。

考 察

人工物 (artifact) としての絵本：その観念的側面について

1. 絵本に関する母親の意識の文化的意味構造 結果の1で示されたように、母親が子どもの認

知発達の促進のために絵本に抱く期待は、『文化の伝達ツール』『信頼と愛情の発達ツール』『想像力や思考能力の発達ツール』といった意味を持つ期待の要素からなることがわかった。この結果は、石川（2006）が絵本と図画工作の教材比較をした保育学生の絵本に対する発達の期待とも類似した結果となった。絵本を利用する大人の発達の期待は、一次元で成り立っているわけではなく、本研究では少なくとも3つの次元の発達の期待からなることが明らかとなった。この3つの次元は、絵本の読み活動で得られる子どもの認知発達は、万能であるわけではなく、発達の特定の領域に制約される、あるいは特定の領域に特化した認知的発達促進の場となることを示したものと考えられた。今回の研究報告では、絵本に関する母親の意識は『文化の伝達ツール』『信頼と愛情の発達ツール』『想像力や思考能力の発達ツール』の3つの文化的意味からなることを明らかにした。このことは、母と子の絵本活動で生じる目的志向的行為に少なくとも上述の3つの次元が目標として、埋め込まれていると考えることを可能にした。

2. 子どもの発達と母親の期待の変化 『文化の伝達ツール』『信頼と愛情の発達ツール』『想像力や思考能力の発達ツール』を構成する項目が、子どもの発達水準の違いによって期待が変化するかについては、変化する因子項目としない因子項目があることが明らかとなった。

a. 子どもの発達水準に応じて変化する因子：『文化の伝達ツール』の因子は子どもの発達の水準に関連して発達の期待が変化した。この因子を構成する項目を多重比較等で詳細に分析した結果などから、母親は、子どもの発達年齢が3歳に達する前後で、文化的に子どもに伝えたい内容を質的に転換あるいは、拡張したいという意識を持つことがわかった。この母親の意識は、絵本の構造（表現枠組み、表現形式、表現内容）の多様さと関連すると考えられた。つまり絵本の構造が単純なものから複雑なものまで存在するのは、主に『文化の伝達ツール』として子どもの学習に呼応するように作られていることを示す結果と考えられた。

b. 子どもの発達水準に応じて変化しない因子：『信頼と愛情の発達ツール』『想像力や思考能力の発達ツール』は、子どもの発達の水準に応じてほとんど変化することがなかった。絵本を用いることで、子どもとの愛着の基盤を持つとする意識、あるいは子どもが想像性豊かにまた自分自身で思考して主体的に生きるように願う、母親の意識は、子どもの発達水準に関わりなく不変であると考えられる。それは、人間として生き抜くための存在的意味を学習する文化的装置として期待される絵本のもうひとつの観念的側面を示すと考えられた。

絵本を子どもに利用しようとする母親の絵本に対する文化的意味構造は、子どもの発達水準によって変化するものと、普遍的に変化しないものとの構成される。絵本という人工物は、社会情勢等によって文化として伝達する内容の変化に臨機応変に対応できる機能と、人間として生きるために歴史的に普遍的に伝えられる内容に対応できる機能、その両方を併せ持つと考えられる。

なぜ絵本に動機づけられるのか

1. 動因としての記憶, 誘因としての絵本 今回の自由記述では, 資料としての数こそ少なかったが, そこに記述された内容から, 母親が子ども時代に出会っている絵本, 読み聞かせてもらった経験が, 母親の中で温かい懐かしい記憶として残っていることを示した。その記憶が, 実際に絵本を利用しようとする動因として働き, 絵本があり子どもがいる場において絵本を利用しようとする動機となると考えられた。母親は, 自分の子どもと絵本活動を行なう際, 楽しい, 癒される, ほっと一息, 和むと感じ, 絵本を見て喜ぶ子どもの姿を見て, 嬉しい, かわいいと思う。また絵本を読む時間が幸せと感じている。つまり, 絵本があり子どもがいる場にある絵本自体がすでに母親にとって行動を起こす誘因となっていると考えられる。絵本はこのように母親自身の絵本活動の記憶を介して, 母親の絵本活動を誘発させる心理的装置でもあると考えられる。

2. 世代性を担う絵本の読み活動 Figure 4 において説明したとおり, 母親は子どものときの自身の読み活動の記憶と現在の自分の子どもとの読み活動の経験, 両方によって絵本の読み活動に動機づけられる。また, 絵本の読み活動は母親自身に快反応をもたらしその反応によって母親自身を強化していると考えられる。この体験の学習が絵本の読み活動を維持する結果となっていることは, 前述したとおりである。この結果を基に時間を未来に向けて示したものが, Figure 4 の上付け文字 F で示してある部分である。つまり, 現在, 子どもである人が, 将来, 大人になり, 自分の子どもを持つようになったとき, 将来の母親は, 自分の読み活動の体験記憶を動因にまた, 実際の子どもと過ごす空間にある絵本が誘因となって, 絵本に動機づけられた読み活動を行なうと予想される。これは柳田 (2009) が, 大人は絵本に3度出会うと語っている体験的知見と合致する。つまり, 絵本という人工物は, 親と子という世代の違う人間をつなぎつつ文化を伝える, 世代性を担う文化・歴史的な存在的意味を持つものであることをも示唆していると考えられる。

終わりに

本研究の目的は, 第1に, 絵本に対する母親の発達の期待は, どのような文化的意味構造をもつのかを明らかにすることであった。この点に関しては3つの次元『文化の伝達ツール』『信頼と愛情の発達ツール』『想像力や思考能力の発達ツール』の文化的意味構造が示され, 人工物 (artifact) としての絵本の観念的側面がある程度明らかとなった。第2は, 絵本に対する母親の発達の期待は, 子どもの発達水準によって変化するものなのか, 否かについて明らかにすることであった。3つの次元のうち『文化の伝達ツール』のみ子どもの発達水準によって変化する事が明らかとなった。その他は, ほぼ普遍的な願いとなる事がわかった。絵本自体の構造の特徴的な枠組み, 形式, 内容の多様さは, 子どもの発達水準に応じ文化を伝達するために作り出された人工物 (artifact) としての構造であることが示唆される結果となった。第3は, 子どもとの活動において母親が絵本に動

機づけられる理由を明らかにすることであったが、母親自身が子どものとき体験した絵本の読み活動の記憶と、現在、実際に行なっている自分の子どもとの読み活動が、絵本への動因および誘因となり、絵本がありまた子どもがいる実際の場において絵本に動機づけられることが明らかとなった。本研究の目的とは直接していなかったが、絵本が世代性をつなぐ人工物としての役割を担う可能性も示す結果となった。

今回の研究は、絵本は Cole (1977, 1994) のいう人工物 (artifact) としての特性を持つものであり、子どものある領域の認知発達の促進に役立つものであることを明らかにしたといえる。今後はこの知見を、読み活動それ自体との関連で検討していきたいと考えている。

(謝辞)

本研究の主旨をご理解いただき、またご協力してくださった保護者の皆様と保育園および幼稚園の保育者の皆様に心から感謝いたします。

(追記)

本研究は、2005年の日本発達心理学会において発表したものを大幅に加筆修正したものである。

文献

- 秋田喜代美・無藤隆 (1996) 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の研究. 教育心理学研究, 44, 109-120.
- Cole, M. (1977) Cultural Psychology: A once and future discipline. The Belknap Press of Harvard University Press. マイケル・コール著, 天野清訳 (2002) 文化心理学: 発達・認知・活動への文化-歴史的アプローチ. 新曜社.
- Cole, M. (1996) Cultural psychology. Cambridge. The belknap press of harvard university press.
- 石川由美子 (1998) 絵本の構造特徴: 子どもは絵本理解に物語スキーマを利用するのか? 筑波大学医療技術短期大学部研究報告, 19, 61-69.
- 石川隆・石川由美子 (2001) 保育資源と子どもの発達. 発達科学研究 (宮城学院女子大学附属発達科学研究所), 1, 1-6.
- 石川隆・石川由美子 (2003) アーティファクトとしての保育教材. 発達科学研究 (宮城学院女子大学附属発達科学研究所), 3, 13-19.
- 石川由美子・石川隆 (2004) 絵本の構造—物理的構造と表現構造—. 発達科学研究 (宮城学院女子大学附属発達科学研究所), 4, 41-49.
- 石川由美子 (2005) 子どもの発達に対する絵本利用の効果に関する母親の期待. 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 578.
- 石川由美子 (2006) 保育学生が保育教材に抱く発達の期待—絵本および図画工作に対して抱く期待の比較検討—. 国際幼児教育研究, 12, 39-49.
- 石川由美子 (2009) 絵本を媒介とした母子活動と子どもの発達—「めくる」行為の存在的 (行為的) 意味について—. 日本発達心理学会大第20回大会発表論文集, 428.
- 石川由美子 (2010) 絵本を媒介とした母子活動と子どもの発達—「指さし」の存在的 (行為的) 意味: 「○○は、これとこれ、ママはどれにする?」—. 日本発達心理学会大第21回大会発表論文集,

- 542.
- 光田基郎 (2005) 電算-画面上で読み聞かせた絵本の理解に関する4歳児と5歳児の異. 大経大論集, 50(2), 85-96.
- 光田基郎(2006)4-5歳児に電算画面で読み聞かせた絵本理解における推論の寄与. 大経大論集, 57(4), 97-112.
- Ninio, A., and Bruner, J. S. (1978) The achievement and antecedents of labeling. *Journal of child language*, 5, 1-15.
- Ninio, A. (1983) Joint book reading as a multiple vocabulary acquisition device. *Developmental psychology*, 19, 3, 445-451.
- Panofsky, C. P. (1994) Developing the Representational functions of language: The Role of Parent-Child Book-Reading Activity. John, S., Panofsky, C. P., and Smith, L. W. (Eds.), *Sociological Approach to language and literacy: An interactionist perspectives*. Canbrige University press, 223-242.
- Snow, C. E. and Goldfield, B. A. (1983) Turn the page: Situation — Specific language acquisition. *Journal of Child Language*, 10, 551-569.
- Williams, R. (1983) *Keywords. A VOCABLARY OF CULTURE AND SOCIETY REVISED EDITION*. Oxford University Press.
- 吉岡真知子 (2004) 日本の子育て文化における子ども観—日本における子育ての習俗からみて. 東大
阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要, 2, 29-35.
- 柳田邦男 (2009) *みんな絵本から*, 講談社.

絵本に対する期待調査

資料

注意！ 必ず御記入ください

ご記入者（○をつけてください）・・・・・・ 母 父 その他（ ）
 お子さんの生年月日・・・・・・平成 年 月 日生
 アンケート記述日・・・・・・平成 17年 月 日記入

I. お子さんに絵本を利用されるにあたって、絵本にどのような期待を抱かれていますか。下記項目で当てはまると思われる番号に○をつけてください。

5：とてもそう思う， 4：ややそう思う， 3：どちらともいえない， 2：あまりそう思わない，
 1：まったく思わない

- | | | | | | |
|------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. 子どもが本の世界を楽しむため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 空想したり夢をもてるようにするため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 物事を深く考えるきっかけを与えるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 本を好きな子にするため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 絵本を通して親子のふれあいをするため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6. 言葉を増やすため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. 文章を読む力を育てるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 子どもに集中力をつけさせるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9. 古くから伝えられている話は知ってもらいたいから | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 文字が覚えられるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11. 話をする力をつけるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 心が落ち着くため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. 絵本を通してしつけをするため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14. 絵本を通して教訓を知ってもらうため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 興味、関心を広げるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. 絵本を通して親子のコミュニケーションをはかるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17. 生活習慣を意識づけさせるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18. 社会性を絵本を通して教えるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19. 感情豊かな子にさせるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20. 子どもが安心して眠れるようにするため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 21. 子どもにとって必要な教養を身につけさせるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22. 日常生活に必要な知識を身につけさせるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 23. 絵本を通してスキミングをはかるため | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

II. その他、絵本をお子さんに利用するにあたって意識していること、あるいは絵本に関する想い、思い出などありましたら、できるだけご記入お願いします。